

ふるさと再発見

～重源上人の里 みてある記～

(七) 三谷の秀蓮坊跡 (寿福院)・奈良原

前回は梶畑の袈裟岩堂を案内しましたが、梶畑から真っ直ぐ南に延びた山道を登り一升峠を越えると奥谷の寿福院に出ます。この南北に伸びた山道は、滑や藤ヶ谷方面の奥地で伐採した東大寺再建の用材を搬出するために開発されたであろう林道で、峠にロクロを仕掛けて巨木を巻き上げ三谷川に出す、主要な搬出ルートです。寿福院あたりはその三谷側の拠点となったところでしょう。ロクロ谷の地名が残っています。

寿福院は寺伝によると、俊乗房重源上人のお弟子秀蓮房源覚上人が、羽高の山に建立した秀蓮坊というお寺の古跡を、万治二年(1659)に現在地に移し、寺号を寿福院と改めたということです。その秀蓮坊跡は



寿福院側から見た正門

三谷川を挟んで寿福院の南側、羽高の山尾根の山腹にあり、今は地名となって残り、堂宇や境内の後には平坦で、池の跡がうかがえるだけとのこと。

秀蓮坊の境内からは、北にロクロを仕掛けた一升峠から寿福院コースを、西側には奈良原を一望におさめ、用材運搬の様子を把握し、三谷一帯の杣事業を采配していたのでしょう。秀蓮坊跡には是非登ってみたいと、前々から思っていたのですが、今の体調ではかなわぬ夢となりました。

奈良原のバス停のすぐそばの坂を少し上がると、右手に石ころを集めた上に千人塚の宝篋印塔があります。因みに法光寺にも杣事業の終わりに、事故で亡くなられた方がたを弔うための千人塚と米とぎ池があります。ここには千人塚の近くの民家の裏に、米とぎの池があります。供養の時、この池の水で米を研いだということです。

奈良原は、奈良から来た職人が滞在していたので、この地名がついたといいますが、職人集の宿坊や飯場があった所でしょう。木地屋の地名も、木で食器などの生活用品を作る木地屋職人の工場があった所でしょう。

三谷をさらに下り、国木のバス停から奥に入る道を進むと、ずっと奥の山肌に木が生えていない部分が見えますが、北谷の板落しと言って、切り出した大木を山の上から滑り落とした場所で、今もって山の斜面に木が生えていません。